



「新版 NHK 気象ハンドブック」
NHK 放送文化研究所編
日本放送出版協会、1995年9月発行、
A5版、278ページ、2136円

台風が日本に接近したり、梅雨前線の活動が活発となったたり、あるいは低気圧が急発達する恐れが生じた場合には、気象庁は注意報や警報のほかに、台風情報や大雨情報、低気圧情報などを発表して国民に警戒を呼び掛ける。気象庁が発表する各種の情報のうち、「警報」については都道府県庁や警察、海上保安庁、NTT などを通じて国民に伝達するルートがあるが、大部分の情報は、テレビ、ラジオ、新聞等の報道機関を通じて国民に伝えられる。火山や地震に関する情報なども同様である。

NHK などの報道機関は、気象庁が発表する情報の内容を正確さを失わないよう注意しながら可能な限りかみくだき、解説を加えて多くの国民に分かりやすく報道している。情報を発信する気象庁と情報を受け取る国民との間にたつてやさしく解説するためには、放送記者や新聞記者自身がその情報の内容を正しく理解するとともに、専門用語を避け大多数の国民に分ってもらえる言葉を使って原稿を書く必要がある。しかしながら、記事を書く立場の放送記者や新聞記者も、気象学や地震学を専攻した人はごくまれで、事件や事故の記事を担当しながら気象や地震・火山についても独学で勉強する人が多いと聞く。従って、一般国民はもとより記者達も、気象関係の入門書を求めているとあって良い。

9年近く前に発行された、本書の前身ともいえるべき、「NHK 最新気象用語ハンドブック」は、気象庁などの専門家が使用する気象用語と記者や一般国民が使う用語の間にあるギャップを分かりやすい言葉で橋渡しすることを中心に編集され、加えて気象一般の入門書も兼ねて刊行された。

しかし、近年の天気予報技術の発展はめざましく、

数値予報も精密となり、その結果から天気予報を導き出す方式にも新しい考え方が取入れられるようになってきたので、天気予報の発表様式も変わりつつある。また、気象観測の技術も格段に発展してきたので、これらについての詳しい解説も待たれていた。加えて、オゾン層の破壊や地球の温暖化も最近特に注目されて大方の関心事となっている。さらに、地震・火山関係では、近年になって大きな地震が連続して発生したり、火山活動が活発になるなど、地球内部の活動も大きな注目を集めているので、これらについても新たに書き加える必要が生じて、今回の改訂が行われたようで、時期を得た刊行として歓迎したい。

本書の内容は、次のように5章からなっており、国内で起こる気象現象については特に多くのページをさいてかなり詳しく解説している。その他巻頭に、最近の天気予報システムの出力図や災害写真をカラー印刷で付加している。

1. 天気予報(44)
2. 日本のお天気(142)
3. 地震と火山(36)
4. 地球環境と気候変動(18)
5. 気象のことは集(18) (括弧内は使用ページ数)

執筆は、気象庁の現役・OB のほか大学の先生等も加わって正確さを期しており、最終的な取りまとめは、NHK-TV で分りやすい天気解説を行い長年活躍された気象庁OBの宮沢清治氏が担当している。自然現象を厳密に解説するには、いわゆる専門用語を多用せざるを得ない場合が多いが、本書ではその専門用語をかみくだいて解説することに大きな労力を注いでいると言って良いのではないだろうか。

気象情報、地震情報等の活用は、発表されるに至った経過や背景等を理解していればいる程ハイレベルなものとなると確信する。多くの防災関係者や一般の方々にも、この種の入門書を参考にしながら気象情報等を利用されることをお勧めしたい。その意味で、巻末の索引も充実しており、使いやすく編集されていると思う。
(下関地方気象台 飯島 邦彦)